

ジャック・ロンドン 「ハワイのサーフィンを習う」

神 崎 浩

アラスカの厳寒の地を舞台にした作品で世界的な名声を博したジャック・ロンドンが、「野性の呼び声」を出版して4年後に、自分で設計したスナーク号に乗って、今度はハワイを経由して常夏の南太平洋の島々を漫遊する旅に出発したのは、1907年4月22日のことだった。サンフランシスコを出航して約4週間後の5月20日、スナーク号はロンドン夫妻と4人の乗組員を乗せてオアフ島の真珠湾に入港した。

ジャックは以前ハワイ諸島を通過したことがあったが、夫婦での訪問は初めてである。彼等はホノルルで6週間を過し、パーティーに出席したり、島内を見物したり、素晴らしい海での水泳を楽しむなどした後、モロカイ、マウイ、ハワイなどの島々を訪れた。

マウイ島では、ハレアカラ牧場に滞在し、牧場主のルイス・フォン・テンプスキーの案内で、牛追い、焼き印押し、仔馬の訓練などを見学したり、ハレアカラ山頂への登頂を試みるなどしている。この時の体験がもとになって、「太陽の家」という短篇が書かれるのである。

また、ライ病患者が収容されていたモロカイ島でも1週間ほど過しているが、その間妻と共にライ病患者にまじって暮し、彼等の依頼によって、モロカイ島のライ患者達が世間から隔離されているが、幸福な生活をしていることを知らせるために、「モロカイ島のライ患者達」を書いている。

ジャックがホノルルに滞在している時、友人のアレキサンダー・ヒューム・フォードが手解きをしてくれて、ワイキキ・ビーチでサーフィンを習っている。今では世間に良く知られ、多くの愛好家達が世界中にいるサー

フィンも、20世紀初頭では、ほとんど未知のスポーツであった。

その未知のスポーツに挑戦した時の体験を、彼は「王者のスポーツ」というエッセイにしてまとめているのである。

十代の頃、サンフランシスコ湾でカキの密漁をやり、その後、浮浪者となって貨物列車でアメリカ中を流れ歩き、アラスカで金鉱が発見されたと聞くと、早速、金鉱探しに出掛けて行くという、常に留まることを知らない行動派のジャックが、ハワイで初めてサーフィンに出会って、これに敢然と立ち向って行ったのは、当然のことと言えるのである。

ハワイでは恐らく何百年も前から行なわれていたサーフィンを、国際的に注目させたのがジャック・ロンドンのエッセイであったということは、案外知られていない事実なのである。それどころか、彼のハワイ訪問も、後の彼の文学に対する研究に於いては、ほとんど無視されてしまっているようである。

ここに「王者のスポーツ」を訳出して、彼のハワイに於ける一断面を推測するための資料に供したいと思っている。

なお、ロンドン夫妻のスナーク号は、1907年10月7日にハワイ島ヒロ湾を出航し、南太平洋に向った。

試訳

「王者のスポーツ」

それはそのタイトルの通り、この世の生れながらの王たちの、王者のスポーツである。ワイキキ・ビーチの水際まで草が茂り、50フィートほど先には海が果しなく続いている。木立も海水の際まで茂り、その木蔭に腰を下ろして海に目を向け、巨大な寄せ波が雷鳴を轟かせて足元の海岸に寄せて来るのを眺めるのである。半マイル先にサンゴ礁があり、白い波頭のうねりが、ターコイズ・ブルーの中から突然空中に立ち上り、岸に向って突進して来る。海の数え切れない白い大軍である。腰を下ろして絶え間ない

海鳴りを聞き、終ることのない前進を眺め、そして、荒れ狂い、あわ立ち、轟くことで、この途方もない力を表わすものの前に人間はいかに小さく、壊れやすいものかを感じるのである。実際、人間は顕微鏡的に小さく感じ、この海と格闘をすることが、ほとんど恐怖にも似た不安の戦慄を想像力の中に起させる。なんととっても、波は1マイルも長く、牛の口をした怪物で、1,000トンの重みがあり、人間が走るより速く岸に向かって押し寄せる。どんなチャンスがあるのだろうか。まるでチャンスがないというのが、身を縮ませている私の判断である。そして、草と木蔭は、身を置く場所として非常に良い場所だと、腰を下ろし、眺め、耳をすまして考えるのである。

そして突然、大きな煙が、アワ立ち白くかき回されている波の中からまるで海神のように空に向かって立ち登り、その目の回るような、くづれかかり、覆いかぶさり、転落する不安定な波頭の上から、人間の黒い頭が現われるのである。突進する白波の間を通り、素早く立ち上って来る。黒い肩、胸、腰、手足の全てが不意に視野の中に映し出される。ほんの一瞬前までは、広大な人けのない場所であり、克服できそうもない響きを立てていた所が、今や、一人の男が直立し、全身を現わし、その荒々しい動きの中で狂ったようにもがき苦しむこともなく、あの力強い怪物に沈められ、押しつぶされ、翻弄されることなく、静かに堂々と目のくらむような頂上に平衡を保って立ちただかり、足を激しくかきまぜる泡の中に沈め、膝までは塩気を含んだ煙が立ち昇り、それ以外の身体を水上に出し、日光にきらめかせて空中を飛んでいる。飛ぶように前進し、彼が立ち上っている寄せ波と同じ速さで飛んでいる。彼はマーキュリーだ。褐色のマーキュリーだ。踵には羽根が生え、その踵には海の速い動きがある。実際、海の中から彼は海の背にとび乗った。そして彼は唸り声をあげ吠えたてる海に乗って、その海の背中から振り落されることはない。しかも狂ったように伸びをしたりバランスを取るようなことはしない。彼が立っている海の深みの中か

ら何かの奇跡によって突然彫刻された像のように、冷静で動かない。そして彼は岸に向かってまっしぐらに、羽根の生えた踵と打ち寄せる白い波頭に乗って、飛んでいる。白波が無駄にくだけ落ち、海岸にいる者の足元に力を使い果たして打ち寄せる時、荒々しく泡が飛び散り、長い騒々しい寄せ波の音がする。そして、その足元に熱帯の太陽に日焼けして黄金色に褐色になったハワイの男が、静かに岸に上陸する。数分前は4分の1マイル離れた所の小さな点であった彼は、「牛の口をした白波に身体を縛りつけて」それに乗り、そして、岸の木蔭に腰を下している人物を無造作にちらりと見て、彼の素晴らしい肉体の身のこなしという妙技を誇らしげに示すのである。彼は原住民である。そしてそれ以上に海の事柄や荒波のことを身につけている王者に属する一族の男であり、周囲を威圧する勢いを示していた。

そして私は、トリストラムがあゝの運命の朝に海と最後の格闘を行なったことを、腰を下ろして考え、さらに、トリストラムができなかったことをハワイの男が行なったという事実と、トリストラムが知ることのできなかった海の楽しみを彼が知っているという事実を考えるのである。そしてさらに私は考える。この海岸の涼しい木蔭に座っているのはとても具合のいいことだ。しかしお前は男だ、王者たる人類の一員だ、ハワイの男にできることなら、お前にもできるのだ。行け。この温和な気候には邪魔な着物は脱ぎ捨てろ。海に入って海と戦え、自分に備わった技術と力で踵をはばたかせるのだ、海の打ち寄せる白波にはみを噛ませろ、波を支配し王者のごとく波の背にまたがるのだ。

私がサーフィンと取り組むことになったのは、こんなことから起ったのだった。そしてそれと取り組んだので、それまで以上にサーフィンを王者のスポーツだと思うのである。だが、まず最初に、その物理的現象を説明しよう。波は伝達する動揺である。波の本体を作っている水は動かない。もし動くとしたら、池に石が投げ込まれて、さざ波がどンドン輪となって

広がって行けば、中心部には大きくなり続ける穴ができるだろう。そんなことはない。波の本体を作る水は静止しているのである。だから、海の表面の特定な一部分を見ているとすると、無数に連続した波によって伝達されて同じ水が上下に無数の動揺をするのを見ることになる。さて、この伝達された動揺が岸に向っていると想像してみよう。海の底が浅くなると、波の下の部分が最初に海底に当って止る。しかし水は流動体である。そして波の上部はどこにも当らないので動揺を伝達し続け、動き続ける。そして波の頂上動き続けているのにその底の部分が遅れるとき、何か必ず起る。波の底が下部から消失し、波頭が前に向かって落下する。そうなった時、波は巻き込み、うねり、轟くのである。波の底が地表にぶつかった時、すべての寄せ波の起る原因となるのだ。

だが、穏やかなうねりから泡立つ白波への変化は、海底が突然浅くなっている所以外では、急激なものではない。仮に、底が4分の1マイルから1マイルの間、次第に浅くなれば、同じ間隔で変化が起る。そのような海底がワイキキ・ビーチの沖である。そしてそれが、サーフィン用の素晴らしい波を作る。丁度波がくずれ始める時、寄せ波の背中に飛び乗り、岸に向かってくずれている間中ずっとその上に乗ったままなのである。

そして今度は、サーフィンの詳細な物理現象である。6フィートの長さで、2フィートの幅があり、やや楕円形の平らな板に乗る。小さな子供が滑降用のそりに乗るように腹ばいになって、沖に向かって両手で漕ぐ。そのあたりでは波のうねりが高まっている。その場所で静かに板の上に腹ばいになっている。次々と波のうねりは前方や後方で、また下を通り頭上を越えて人を残して岸に向かって突き進んで行く。波が高まる時、急な勾配となる。板に乗ってその急な勾配の表面にいる自分を想像するといいい。もしそのままの状態だったら、丁度、子供が滑降用のそりに乗って丘を滑り下りるように、滑り下りるだろう。「だが、波はじっとしてはいない」という反論がある。その通りだ。しかし、波を作っている水は静止しているの

ある。そして、そこに秘密がある。もしその波の表面を滑り降り始めたら、ずっと滑り続けることになり、決して底に到着することはない。どうか笑わないでもらいたい。その波の表面はおそらく6フィートくらいのものであろう。それでもその波の表面を4分の1マイルか2分の1マイル滑り下ることができるのだ。そして、底に着くことはない。つまり、わかって欲しいのだが、波はただ動揺または運動力の伝達にすぎないのであり、波を作る水は刻々と入れ代っているのだから、新しい水が波の移動するのと同じ速さで波を押し上げているのである。この新しい水を滑り下りるのであり、波の上の以前と同じ場所にいるのだから、持ち上げて波を作っているさらに新しい水を滑り下りるのである。波が移動するのとまったく正確に同じ速さで滑っているのだ。もし波が15マイルの時速で移動すれば、波に乗っている人も時速15マイルで滑る。岸と人との間には4分の1マイルの水が広がっている。波が移動する時、この水はひとりでに波として盛り上がる。重力が残りを引き受け、人は下に向かって行き、その距離全部を滑るのである。もしも、滑っている時水と一緒に動いているという考えを、まだ心に抱いているのなら、水の中に両手を入れて漕いでみるといい。水を掻くのに異常な速さが必要なことがわかるだろう。つまり、その水は人が波に乗って急速に前進するのと同じ速さで、後方へ残されているのである。

さて、サーフィンのもう一つの局面についてである。すべての規則には例外がある。波の中の水は前進しないのは事実である。だが、海の縦揺れと呼ばれるものがある。前にくずれ落ちる波の頂上の水は前進する。それはその波頭で顔をピシヤリと打たれるとか、波頭の下に入ってしまった、水中でものすごい一撃をくらって、30秒ぐらい息を切らすことがあれば、すぐにそのことを認識するだろう。波の上部の水は波の下部の水の上に乗っている。しかし、波の底が海底に当たると、波底は止る。一方、上部は

前進を続ける。底の波はもはや上部の波を支えてはいない。しっかりとした水が下で支えていた所は、今では空気である。そして、初めて上部の波は引力の支配を感じる。そして下方に落ちる。それと同時に進み方が遅い波の下部からばらばらに裂かれて、前方へ飛び散る。そしてそのために、サーフボードに乗ることは、ただ単に静かに坂を滑り下りるのとは、もう一つ違った何かがあるのだ。実際、怪力無双の巨人の手で持ち上げられ、岸に向って引っぱられるかのようである。

私は涼しい木蔭を離れて、水着を着て、サーフボードを掴んだ。それは小さ過ぎる板だった。しかし、私は知らなかったし、誰も教えてくれる者はいなかった。私は浅瀬にいるハワイアンの子供達と一緒にになった。そこには寄せ波が十分に寄せて来るし、波は小さかった。つまり普通の幼稚園程度の練習場である。私は小さな原住民の子供達を観察した。手頃に見える寄せ波がやって来ると、彼等は板の上にドサッと腹這いになり、足で夢中になって蹴って波に乗って岸まで来る。私は彼等を見習うことにした。彼等を観察し、彼等がやったすべてのことをやろうとした。そしてまったく失敗してしまった。寄せ波は通り過ぎて行き、私はそれに乗っていなかった。何回も試してみた。子供達より二倍も夢中に蹴ったが、それでも失敗した。周囲には6人ぐらいいただろう。いい波が来ると皆んな板に飛び乗った。河の蒸気船の外輪のように我々の足は激しく動いたようだ、そして、チビの腕白達は疾走して行くのに、私はみっともなくも後に取り残されてしまった。

私はまる1時間やってみたが、岸へ向って私を押ししてくれる波は一つも捉まらなかった。そのうちに、友人のアレキサンダー・ヒューム・フォードが来た。彼はプロの世界旅行家であり、いつも大きな刺激を求めることに熱中していた。そしてワイキキに刺激を見つけたのだった。彼はオーストラリアに向っていたのだが、サーフィンにスリルがあるかどうかを試すために、1週間立ち寄ったのだった。そしてすっかりサーフィンが気に入

ってしまった。彼は1ヶ月間、毎日サーフィンをやり、それでもなお、魅力が少なくなっているという徴候は見られなかった。彼は確信を持って言った。

「その板はよせよ」と彼は言った。「すぐにそいつを捨てちまえ。お前が乗ろうとしているやり方を見てみろ。もし板の先端が底にぶつかればお前は腹を切ってしまうぞ。そら、俺の板を取って見ろ。これが大人のサイズだ」

私は知識に直面した時は常に謙虚になる。フォードは知識を持っていた。彼はどうやって正しく板に跨がるかを、やって見せてくれた。それから、いい寄せ波を待って、タイミングよく私を押し出発させてくれた。あゝ、何んと素晴らしい瞬間だったろう。波が私をしっかりと掴み放り投げたように感じた。150フィートを突進して、波と共に砂地に到着した。その瞬間から私は夢中になってしまった。彼の板を持って、フォードの所へザブザブと歩いて行った。その板は大きなもので、数インチの厚みがあり、75ポンドはたっぷりと目方があった。彼はいろいろと注告をしてくれた。彼は誰からも教わったのではなく、数週間かかって苦労して学んだことをすべて、30分ほどの間に私に教えてくれた。私は実際彼が苦労して会得したことを直接教わったのだった。そして30分のうちに、私は自分でスタートして波に乗ることができるようになった。何度も繰り返してやってみた。そしてフォードはほめてくれ注意をしてくれた。例えば、板の上の少し前方に乗るように、前に行き過ぎないように教えてくれた。だが、私は少し前方に乗ったようだった。つまり、私が陸に向かって進んで行った時、その情けない板は先端を底に突き立てて突然止り、宙返りをし、同時に我々の関係を手荒く引き離してしまったからだった。私は木片のように空中に放り上げられて、恥かしくもドッと崩れ落ちる寄せ波の下に沈められてしまった。そして、もしフォードがいなかったら、私は腹を切っていただろうということに気付いたのだった。そんな特別な危険はスポーツの一部

なんだ、とフォードは言う。恐らく彼もホノルルを離れる前にそのような危険な目に会うことだろう。そうすれば、彼の刺激的な事柄に対する憧れは、当分満足するだろうと私は確信している。

結局のところ、私は殺人が、特に女性に対してであった場合には、自殺より悪いという確固した信念を持っている。フォードは私が殺人を犯すところを救ってくれた。「お前の足が舵だと思え」と彼は言った。「両足を一緒にそろえて、それで舵を取るのだ」。数分後、私はうねりに乗って突進して行った。岸に近づくと、そこには、水の中に、突然私の前に女性が腰から上を水の上に出して現われた。どうやって私の乗っているうねりを止めたらいいのだろうか。まるで死んだ女性のように思えた。板は75ポンドあり、私は165ポンドの目方があった。重さが加わって、時速15マイルの速度がついていた。板と私とで、突進する物体を作り上げていた。その哀れな軟かい女性に与える衝撃の力を算出するのは物理学者にまかせるとしよう。その時、私の守護神、フォードを思い出した。「足で舵を取れ！」という声が私の頭に鳴り渡った。私は両足で舵を取った。鋭くす速く両足と全力を使って舵を取った。板は波頭の上で側面を向けて進路を変えた。一度に多くのことが起った。波は通り過ぎながら私をもみくちやにした。波が進む時の軽い一撃だったが、それは私を板からたたき落とし、突進する水中に突っ込んで底まで行き、底に激突してゴロゴロと転がされた。私は呼吸をするために頭を水から出し、それから足で立った。私の前にはその女性が立っていた。私は英雄のような気分だった。彼女の命を救ったのだ。彼女は私を見て笑った。興奮した笑いではなかった。彼女は自分の危険をまるで知らなかったのだ。とにかく、私は自分を慰めた。彼女を救ったのは私ではなくフォードだったのだ。そして私は英雄のような気分になどなる必要はなかったのである。おまけに、あの足の舵取りは素晴しかった。数分間のうちに練習を積んで、私は何人かの水浴者を内に外に縫うように進み、寄せ波の頂上に留まっていて、波の下に入ってしまうようにな

った。

「明日はお前を沖の方へ連れて行くぞ」とフォードは言った。

彼が指さす沖の方を見ると、巨大な煙を上げているうねりが見えた。それは私が乗っていた寄せ波が、まるでさざ波ほどに見えるものだった。もし私が、自分は王者のような人類の一員であることを丁度その時思い出さなかったら、何と答えたかわからない。そこで、私がやっと言ったのは、「よし、明日はあいつに取っ組んでやろう」とだけだった。

ワイキキ・ビーチに寄せて来る水は、すべてのハワイ諸島の岸を洗う水と同じものである。そして見方によっては、特に水泳をする者から見れば、素晴らしい水である。心地いいぐらい冷たく、それでいて、一日中水の中にも寒さを感じないでいられるくらい暖いのである。太陽の下であっても星の下であっても、真昼でも真夜中でも、真冬でも真夏でも、いつでもかまわない。常に同じ温度なのである。つまり、暖か過ぎず、寒過ぎない、丁度いいのだ。素晴らしい水である。昔からの海と同じく塩からく、純粹であり水晶のように澄んでいる。水の性質を考慮すれば、結局、ハワイアン達が水泳に熟練している人種であることは、驚ろくほどのことはないのだ。

そこで翌朝、フォードが来た時、私は不確定の距離を泳ぐために、素晴らしい水の中に飛込んで行った。サーフボードに跨がってというよりはむしろ、その上に腹這いになって、我々は小さなハワイアンの子供達が遊んでいた幼稚園程度の波間を通して漕ぎ出して行った。間もなく我々は大きな水煙りを立てる波が、唸り声を上げている深い所まで来た。ただ単にその波と闘い、立ち向い、波を越え、それを通過して沖へ出て行くだけで、それは十分にスポーツそのものであった。その際、知恵を働かせなければならぬ。つまり、一方では力強い一撃に襲われる闘いであり、もう一方ではそれを器用にさばくのである。即ち、冷淡な力と知恵の力との闘いであ

った。私は間もなくそのことがわかった。寄せ波が私の頭上を越えて行った時、その瞬間エメラルド色の水を通して日の光が見えた。それから頭は下り、私は力一杯板を掴んでいた。次いで衝撃が来た。岸にいた見物人には、私が消えてしまったように見えただろう。実際は、板と私は波頭を通り抜けて、向う側に現われてひと息ついているのだった。そんなものすごい衝撃は、病弱な人や、きゃしゃな人にはお勧めできない。波の裏側には重みがあり、押し寄せる水の衝撃はまるで砂粒を吹きつけるようである。時には半ダースのうねりを通り抜けることがある。そんな時こそ、安定した大地にいることの新しいメリットと、陸地に上っていることの新しい理由を発見しやすくなっているのだ。

沖の方に出て、水煙りを立てている大きなうねりの真只中で、我々の仲間に第三の男が加わった。それはフリースだった。波をくぐり抜けて、目から水を払い落して次の波はどんな具合かを見るために前方を透して見ると、波の背を切り裂いて無造作な姿勢で板の上に真っすぐに立っている日焼けしたブロンズの若い神のような男が見えた。我々は彼が乗っている波へ行った。フォードは彼を呼んだ。彼は空気バネのように波から向きを変え、板を波に呑み込まれないように救い上げて、我々の方に板に乗って来た。そして私に色々なことをやって見せるためにフォードに加わった。特に私がフリースから習ったことは、つまり、時たま来る特別な大きさの寄せ波に如何にして立ち向うかということだった。そのような寄せ波は非常に狂暴なものであり、板の上で波に出会うのは危険であった。だが、フリースが手本を見せてくれたので、そのような強烈な波が私を巻き込もうとするのを見ると、私はいつも板の後方へ滑り下りて、板の下に入ってしまう、腕を頭上に持ち上げて板を支えるのである。そうすれば、もし波が板を私の手からもぎ取って、それで私をなぐりつけようとしても（そのような波がよくやるいたずらである）、私の頭と打撃との間には1フィートかそれ以上のクッションがあることになる。波が通過すれば、板に上って漕

ぎ進むのである。私は多くの人々が自分の板でなぐられて、ひどい怪我をしたのを知っている。

サーフィンと、波との闘いのすべての方法から、私は無抗抵ということを学んだ。ぶつかって来る打撃は避ける。顔をひっぱたこうとする波は、もぐって通り抜ける。足から先に深く沈んで、大きな水煙りを立てて激しくぶつかって来る波を、はるか頭上で通過させる。決して硬くなつてはいけぬ。楽にしていることである。切り裂こうとして向って来る波には身をまかせること。水面下の底流に掴えられて、海底を沖の方に引っぱられたら、それに逆らつてはいけぬ。もし逆らえば溺れてしまうことになる。流れの力の方が強いからである。底流に身をまかせること。流れと一緒に泳いで逆らわないこと。そうすれば、圧迫感がなくなっていることに気がつくだろう。そして、流れと一緒に泳ぎ、流れをだますことで、流れが掴えていられなくなる、それと同時に上に向って泳ぐのである。表面に出るのに何んの苦勞もいらぬ。

サーフィンを習いたいと思う者は丈夫な泳ぎ手でなければならないし、水の下にもぐることに慣れていなければならない。それだけあれば、あとは普通の体力と常識だけが必要なものである。大きな寄せ波の力は予想以上のものである。もみくちやにされて、板と乗り手は引き離され、数百フィートも離ればなれにされてしまう。サーフィンをする者は、自分のことは自分自身で気をつけるようにしなければならない。一緒にいくら沢山のサーフィンをする人達が泳いでいても、その中の誰一人に対しても助けを求めぬことはできない。フォードとフリースと一緒にいたので、私は護ってもらえるものと勝手に想像していたために、深い海の大波の中に初めて泳ぎ出したことをすっかり忘れてしまっていた。しかし、突然大きな波が来たので、私は初めてだったことを思い出し、二人の男達はその波の背に乗って岸へ向って行ってしまった。彼等が私の救助に戻って来るまでに、私は10回以上も違った方法で溺れるところだった。

サーフボードに乗って寄せ波の表面を滑り下りるのだが、まず滑りを始動しなければならない。板と乗り手は、波が追いつく前にかかなりのスピードで岸に向かって動いている必要がある。乗りたい波が来るのを見た時、波に後ろを見せて、力一杯水車のように水を掻いて岸に向かって漕ぐのである。これは波の直前で行なう力泳のようなものである。もし板が十分に速く進んでいけば、波が板を加速して、板は4分の1マイルの滑走を始めるのである。

私は深い海で初めて捉えた最初の大波を決して忘れないだろう。波が来るのを見て、その波に背を向けて命がけで水を掻いた。どんどんと板は速くなって、私の腕が抜け落ちるかのように思えるまでになった。私の後方では何が起っているのかわからなかった。後を見ながら水車のように水を掻くことはできない。波頭がシューシューと音を立て、泡立つのが聞こえ、そして私の板が持ち上げられ、前方に放り出された。最初の30秒ほどは、何が起ったかほとんどわからなかった。目は開いていたのだが、何も見えなかった。それは激しく襲いかかる白い波頭の中に埋められていたからだ。だが私は気にしなかった。私は何よりもまず、波を捉えたことの恍惚とした幸せを意識した。しかしながら、30秒ほどすると物が見え始め、呼吸ができるようになった。私の板の先端が3フィート水中から突き出し、空中を走っているのが見えた。私は体重を前方にかけて、板の先端を下に下げた。それから私は荒々しい動きの中で心を静め、次第にはっきりと見えて来る海岸や浜にいる海水浴の人々を眺めた。私はその波に乗って4分の1マイルに行くことはできなかった。それは、板の先が下るのを防ごうとして、体重を後方に移したのだが、後に寄り過ぎたために、波の後の斜面に落ちてしまったのだった。

それは私がサーフィンを始めて2日目のことであり、自分自身をととても誇りに思った。私は海に4時間いて、終った時、私は次の日には立ったままで岸に入るようにしようと決心した。しかし、その決心は遠いものとな

ってしまった。翌日は、私はベッドにいた。私は病気ではなかったが、とても不快だったのでベッドにいたのだった。ハワイの素晴らしい海のことを述べた時、私はハワイの素晴らしい太陽のことを述べるのを忘れていた。それは南国の太陽であり、さらに、6月の初めの頭上に照る太陽である。それはまた、油断のならない、人を誤ませる太陽でもある。私は生れて初めて、知らないうちに日焼けを起していた。腕、肩、背中では過去に何度も日に焼いていた、そして丈夫になっていた。しかし脚はそうではなかった。そして4時間、私は脚の柔かい部分を丁度いい角度で、垂直のハワイの太陽にさらしていた。私が太陽に焼かれたことに気がついたのは、岸に上ってからだった。日焼けは、初めのうちはただ暖かいだけである。それから次第に強烈になり、水腫れになる。また、皮膚にしわが寄る関節は、曲らなくなる。そのために、次の日、私はベッドで過すことになった。歩くことができなかった。そして、それだから、今日、これをベッドで書いているのである。何もしないでいるより、することの方が楽なものだ。だから、明日こそ、あゝ、明日こそはあの素晴らしい海に出て、フォードやフリースと同じように、立ったまま岸に入って来よう。そして、もし明日失敗しても、次の日か、その次の日にはできるだろう。私が決心したことは、私もまた、海で速度で踵を羽ばたかせ、日焼けし、皮が剥げたマーキュリーになるまでは、スナーク号はホノルルから決して出航しない、ということである。

テキスト

Jack London: *Learning Hawaiian Surfing*, Boom Enterprises, Hawaii, 1983.